

歴史小説論

大岡昇平

同時代ライブラリー 47

歴史小説論

岩波書店

歴史小説論

同時代ライブラリー 47

1990 年 11 月 15 日 第 1 刷発行 ©

定価 750 円

(本体 728 円)

著 者 おお おか しょう へい
大 岡 昇 平

発 行 者 安 江 良 介

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

編集協力：アルク出版企画

印刷製本：精興社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

ISBN 4-00-260047-5

歷史小說論 目次

I 歴史小説論

歴史小説の発生

三

日本の歴史小説

一七

歴史小説の美学

三〇

歴史其儘と歴史離れ

四三

江馬修『山の民』

五五

現代史としての歴史小説

七四

歴史小説論

八九

歴史小説の問題

一二三

II 森 鷗外

森 鷗外

一五二

『堺事件』疑異

一七一

『堺事件』の構図

一七九

——森鷗外における切盛と捏造——

『堺事件』批判その後

二三三

III 文学表現の特質

文学表現の特質

二三七

出典一覧

二六六

解説 露呈する歴史のために

蓮實重彦

二六八

カバー・本扉デザイン＝奥野玲子

I 歷史小說論

歴史小説の発生

歴史小説は百年来絶えず論議されているが、体系的な研究は案外少なく、ハンガリーの哲学者、文学史家ジェルジ・ルカーチ『歴史小説論』（一九三七年）ぐらいしかない。これはマルクス主義文学理論に基いたもので、西欧への紹介はかなりおそく、やっと一九六〇年代になってからである。この点わが国が強く、一九三八年に山村房次の部分訳があり、ルカーチの理論によって、日本の歴史小説の系譜を辿った岩上順一『歴史文学論』が一九四二年に書かれた。

戦争中は国粹主義の高揚があり、当然歴史への反省があつたので、実に多くの歴史小説が書かれている。少し話は古くなるが、この辺から考え直す必要がある、と思う。

歴史小説が小説の中の一つのジャンルとして意識されたのは、近代のことに属する。西欧ではイギリスのウォルター・スコット（一七七一—一八三二）が、古典的な歴史小説の型をつくったといわれている。『ウェイヴァリー』連作の最初の巻が現われたのは一八一四年であつた。

これはナポレオン戦争の終焉と一致している。フランス大革命以来二十数年ヨーロッパが経験した大動乱の結果、歴史の進行を因果的に捉える意識が広がった。教育の普及によって、スコットの小説をベストセラーとする読者が育って来たのであった。

『ウェイヴアリー』はまず動乱と戦争の物語であった。十七、八世紀に、スコットランドがイングランドに侵略されて行く過程の中で、分散された民族の絶望的な抵抗が描かれる。それは敗北の過程であるから、悲愴感を持ち、異様な山地人の風習を描いて、ロマンティックでもあった。

ところがイギリスはすでに十八世紀の中頃から、フィールディング、デフォー等の風俗小説を持っていた。それは筋の面白さを持ちながら、当時の社会風俗を描き出し、平凡人を主人公としている点で、十九世紀的リアリズムの先駆であった。

一方、スコットの小説は、十八世紀末からこういうリアリズムへの反動として起ったロマンティズムの一環としての「ゴシック小説」「暗黒小説」などの、過去への憧憬という要素を持っていた。しかし歴史上の人物の姿態、自然と風俗の描写においては、リアリスティックであつた。技法的には、

一、会話によって筋を運ぶこと

二、人物の衣装や持物を、詳細に描写すること

など、新しい特徴を持っていた。会話はすでにシェイクスピアの史劇に型があつたが、人物の絵画的な描写は全く新しいものであつた。

スコットはわが国ではあまり翻訳されていない。明治十三年に『ラマムーアの花嫁』の一部が『春風情話』として、逍遙によつて翻訳された。これは日本的翻訳小説の走りであるが、明治十年代の外国憧憬、政治趣味が過ぎ去ると共に、過ぎ去つた。大正年間『アイヴァンホー』が全訳されたが、私小説全盛の時代だったので、季節はずれの贈物になつた。

これはスコットが始めてイングラントを扱つた小説で、十字軍の英雄獅子王リチャーズとロビンフッドなどが登場する。いずれも大正時代に輸入されたアメリカ映画の英雄であり、この翻訳の企画は、それらの英雄の人気をあてにしていたが、スコットの小説は、しばしば退屈な時代考証と自然描写を伴つたものだったので、映画の観客と同じ数の読者を動員出来なかつたのであつた。

『アイヴァンホー』はしかし大正末から昭和のはじめにかけて隆盛に赴いた、いわゆる大衆小説に一種の型を与えている。その特徴の一つは、歴史上あまり重要でない人物に、指導的役割を与えることである。アイヴァンホーは善玉のリチャーズ獅子王方のあまり身分の高くない騎士だが、歴史は彼の恋と冒険を通じて物語られ、リチャーズ王やロビンフッドは危機的瞬間に姿を現わすだけである。

この種の副次的人物の冒険を通じて、歴史的事件を書くのが、スコットの発明の一つであった。そしてこの観点はもつと重要でない副人物群を、リアリステイックに描くという手法と繋がっているのである。（例、歌のうまい放浪僧の描写）

ところが、スコットの小説は一八三〇年頃まで、西欧の最大のベストセラーであり、ゲーテ、デュマ、ユーゴー、メリメ、バルザックから、フロベール、プーシユキン、トルストイに到る十九世紀の歴史小説は、スコットの敷いたレールに乗っているのである。

日本ではこれほどの流行は遂に來なかつたが、この手法は奇妙な経過で、現代文学に影響を及ぼした。『大菩薩峠』の作者中里介山がスコットを読んでいたかどうか、決定出来ないが、ニヒリストの剣士机竜之助の遍歴によって、「天誅組」「新撰組」など、幕末の浪士蜂起や暴力団体の「歴史」が側面から描き出されている。「ええじゃないか」のような大衆的行動も絵画的に描写されていて、その珍しさによって読者を魅惑した。

『大菩薩峠』は大正の社会不安を反映していたが、その流行は、後半介山が誇大妄想に陥つて、退屈な宗教的動機を、諸人物に分配しはじめるまで続く。この作品が今日なお大衆小説の古典として引用されるのは理由のあることである。

大佛次郎『赤穂浪士』もスコット、デュマの方法による『忠臣蔵』の書替えであつた。堀田隼人というニヒリストのスパイの活躍を通じて、四十七士の仇討の政治的、社会的背景が描き

出される。忠臣蔵は封建的忠義の発露、或いは集团的暴行、もしくは就職運動ではなく、幕藩体制に対する集团的抗議という、より刺戟的な政治的事件に変貌する。

これは時代的にはコミニズムの第一次弾圧と一致していた。インテリ層の好尚に適って、多くの「高級」な読者を吸収したのであった。しかし『赤穂浪士』は、事件の政治的背景をスパイ小説的に誇張したものでしかなかった。国家老石良雄と米沢藩国家老千坂兵部の対立は、デュマ『三銃士』のリシュリュとバッキンガム公の対立を模倣したもので、歴史的根拠のないものであった。しかしこの大規模な歴史陰謀小説の系譜は、大衆作家達のその作品を文学的に高めようとする熱意によって、一つの型となって現代に到っている。

長谷川伸『荒木又右衛門』は講談的三十六番斬りを、旗本と大名との対立、或いは幕藩初期における国持大名取潰し方針と結びつける。山本周五郎『樅ノ木は残った』も、同じ政治的光源を仮定することによって、伊達騒動を照し出したものである。

この主題はその後実際に行われた幕府の方針の転換によって、正義或いは先見の明という感情的正当化の動機を持っている。大衆作家の庶民的な生活感情によって、屢々説得的な人間像を生み出すのに成功している。

しかしこれらお家騒動物の書替えて仮定された幕府の計画は、実際にはそれほど強力なものではなかった。主題の事件はより広汎な幕府外様藩取潰し計画の一部であるとされ、同時に他

の藩を対象として進行中の類似の計画が暗示されたりするが、それらはみんな実現されなかったものばかりである。それは事件の背景を、より大きく面白くするための虚構なのである。当時、幕府の上層官僚群には、そんなに歴史を動かす力はなかった。

こういう規模雄大な外観を持った歴史小説は、一年間継続してテレビ放映された吉川英治『新平家物語』にも例があつて、それは「組織と人間」や企業間の闘争が、陰謀的に表象される現代人の意識の投影といえる。同じテレビの企画に山岡荘八『徳川家康』の出た頃から、これが企業主の経営学の参考になる、という声が聞かれた。ここにも現代の規模雄大な歴史小説が一般にどう受止められているかを示す指標の一つがあると思われる。

しかし日本の歴史小説には、鷗外の大正年間の『興津弥五右衛門の遺書』『大塩平八郎』から、藤村『夜明け前』（一九二九―三四年）、本庄陸男『石狩川』（一九三八―三九年）を経て、江馬修『山の民』、西野辰吉『秩父困民党』、井上靖『天平の薨』『風濤』、辻邦生『安土往還記』に到る、いわゆる純文学系の流れがある。

これらは歴史そのものではないまでも、その中に動く人物を説得的に捉えようという試みである。それはウォルター・スコットにもあつたものだが、西欧においても、日本と同じように、分解を遂げていた。奇妙なことに一九二〇―三〇年代、つまり日本で『赤穂浪士』が新しい歴史小説の端緒を開いた頃であつた。

『歴史小説論』の著者ルカーチは、周知のように、こんどの大戦前から日本に知られていた。いわゆる社会主義リアリズムによるハンガリーの文学史家で、バルザック、スタンダールについて、マルクス・エンゲルスの古典的な評価（政治的・生活的には貴族的ブルジョア的であつても、客観的にマルクス主義的現実把握に達することが可能とするもの、バルザックがその典型）を踏襲し、政治的偏見があると考えられるのだが、スコット・バルザックの路線は、バルデーシュ『小説家バルザック』（一九四〇年、一九五一年縮刷改訂版）のような地道な研究にも採用されていて、大体妥当とすることが出来るであらう。

西欧の歴史小説はフロベールの『サランボー』から、トルストイ『戦争と平和』を経て、マルタン・デュ・ガール『チボー家の人々』、トマス・マン『ブッデンブルック家』など、家庭的大河小説まで、現代の巨大小説の系譜を作っている。しかし歴史小説論として、系統的研究の対象となることは少ない。

ルカーチ『歴史小説論』は前述のように昭和十三年（一九三八年）に山村房次がロシア語から大部分を訳出した（戦後青木文庫所収）。つまり殆ど発表と同時に、英訳はやっと一九六三年ロンドンで出たばかりである。それほど歴史小説は早くから独立したジャンルとして意識されながら、個別研究の対象にはなり難かったのである。

わが国では私の知る限り、岩上順一『歴史文学論』（一九四二年）が唯一のまとまった研究であ

る。一九三〇年代は、藤村『夜明け前』が完結する一方、林房雄『青年』（一九三二年）、本庄陸男『石狩川』、藤森成吉『渡辺崋山』（一九三五年）など、注目すべき作品が書かれ、転向文学の一環として歴史小説が問題化した時期であつた。文献がこの時期に集中しているのは当然といえる。

本多秋五の『戦争と平和』論も、出版は戦後であるが、この時期に同人雑誌『現代文学』に発表され、彼自ら「転向の書」と呼んでいる。高見順が「歴史小説は過去への逃避である」といったのも、この時期の意識の名残りである。

ルカーチ『歴史小説論』は、当時訳出されなかつた終章では、ナチに対する民主主義的抵抗として、ロマン・ローランやハインリッヒ・マンの歴史小説を高く評価し、ツヴァイクのニヒリスティックな伝記主義を攻撃する姿勢を取っている。つまり歴史小説論は、政治的動因が伴う時、盛んになる傾向が認められるのである。

ルカーチによれば、スコット以後で歴史小説が理論的に発達したのは、一八三〇年頃のフランスにおいてであつた。一八二九年は、バルザック『シュアン党』とメリメ『シャルル九世年代記』の出た年である。一八三〇年にはユーゴーの史劇『エルナニ』の爆発的成功があつた。スタンダール『赤と黒』は全然問題にされなかつたが、七月革命の前夜、王党派と共和主義者の政治的主張の争いが白熱化した時期である。

アルフレ・ド・ヴィニイの歴史小説『サン・マルス』は一八二六年の出版であるが、後で附加された序文「芸術における真実について」で、当時の歴史小説の量的増大に触れている。

「われわれは、みな自分の視線をわれわれの年代に向けた。それはちょうど、すっかり大人になって、大きな諸事件に立ち向いながら、われわれがその青春や青春時代のあやまちをはつきり理解するために、過去をふり返ってみるように」（ルカーチの引用のまま。訳文山村氏、青木文庫本）

ヴィニイは『軍隊の服従と偉大について』の著者であり、王党のイデオログであつたから、大革命以来のフランスの歴史を青春のあやまちと考えるのは当然だつた。

「歴史的諸事実のうちには、ただちに道德的結論を導き得るような、一見明瞭な関連が常に不足している」、従つて歴史的事実と歴史的人物の思い切つた改造は、作家の自由だという。人間は「自分自身のほかなにも知ることとは出来ない」、「歴史全体を理解出来るのは神のみである」、「改作された事実というものは、いつも現実の事実よりもよく構図が取られている。……なぜならば、人間というものは、自分の運命が教訓の形式で自分のまえにあらわれることを欲するからである」。

従つて「外国人」スコットのように、「偉人を地平線上にちらほらさせる」のは邪道であり、われわれのように「英雄」を前景に押し出すべきだ、ということになる。